

＜あとがき＞

森林文化協会の調査研究活動を担う専門組織が、森林や環境の問題に携わる研究者らでつくる「森林環境研究会」である。その活動の1年間の集大成が『森林環境 2025』だ。

地球上の生物種の減少や絶滅が加速する一方で、「アーバンベア」と呼ばれる人里に出没するクマによる人身被害や暮らしへの影響が、社会的関心を集めている。今号の特集では野生動物と人間との関係をめぐる歴史的経緯や理論、そして各地の現状と課題が多角的に描かれ、野生生物の保護や管理について理解を深められる内容となっている。

「トレンド・レビュー」は、クマと人間の暮らしをめぐる記事に加え、自然共生サイトの法制化など旬のテーマを取り上げた。

森林文化協会は2030年までに生物多様性の損失に歯止めをかけて反転させる「ネイチャーポジティブ」の趣旨に賛同し、当協会が1985年から茨城県つくば市で管理している「つくば万博の森」について、24年度前期、国の自然共生サイトに申請し、認定された。審査において、里山に特徴的な生態系があるといった価値が認められた。

森林・里山の豊かな生態系を維持するため、当協会は24年度から新たな公益事業「30by30 自然共生の森づくりプロジェクト」を始めた。手入れが行き届かない森と、環境経営に意欲的な企業とをマッチングし、民間資金による森林整備を促進すると同時に、企業価値の向上を後押ししている。

企業による生物多様性保全の動きが広がっていることを踏まえ、当協会が取材・出稿した、朝日新聞朝刊掲載の特集面「生物多様性 企業が守る、広がるTNFD、自然とビジネスの関係を開示」を、巻末に収容した。

本書を通じて、生物多様性保全への関心が高まり、当協会が理念とする「山と木と人の共生」に向けた歩みが着実に進むことを願っている。

森林文化協会編集長 松村 北斗